

# 児童の生活構造

鈴木 鳴 海

## はじめに

児童文化論の最初の部分のみを紙面の都合上のせることにした。次号以下このつづきをのせる予定である。

最初に児童（幼児）の生活構造をあげた理由は、文化とは窮局のところ、人間の生活の様式である。児童文化を論ずる場合は、児童の生活様式を主体とすることが妥当と考え、まず児童の生活構造のアウトラインから初め、次に文化の意味、児童文化、児童文化と児童のパーソナリティ形成の相互関係、更に児童のパーソナリティ形成過程における知性、情操、意識の発展及びこれらに関連する文化内容等を明らかにしようと考え、大体原稿はできているので、後号において読者に被露し、批判を仰ぎたいと考えている。なお、参考文献は、掲載完了の際に明示する予定である。

## 児 童 の 生 活 構 造

生活とは「世の中でくらしでゆくてだて」である。子供の場合、世の中とは子供の属する社会である。

社会が存続するためには、その社会の構成々員に夫々の役割の分化が行われ、更にその役割がスムーズに行われるための秩序が保たれるための成員に社会の一員として行動の規範に従うことが要求され、成員はその規範に拘束されることになる。

子どもはその社会の成員としてどのような役割が期待されているであろうか。

まずその社会の大人のもつ児童観を見ることにしよう。一般的通念としては、子供は「白紙のように汚れのないもの」「子供は神と等しく罪のないもの」という観

方が伝統的に信じられている。例えばルソーは「神の手を出るときは凡てのものが善であるが、人間の手に移ると凡てのものは悪になる」と言って子どもも神の手から出たものとして、悪に染らないために自然教育を提唱した。後にフレーベルも汎神論の立場をとり、幼児教育の基盤とした。

ところが以上の考え方に対立するものとして子供は社会の後継者という期待説がある。すなわち社会を一つの有機体として捉え、生命あるものとし、過去、現在、未来という順序でつづいてゆく機能を持ち、この機能の中で子供を育成し社会を担うものとして位置づけている。

前者は子供を純粋な生物体として、それを育成する教育理念となり、後者は社会構成員としての人間像を設定している。この二つのものを総合して子供の生活構造を検討するのが妥当と考え以下の考察の基盤にすることにした。まず子供を生物と見るとき、その生命の成長のための機能の考察から始めることになろう。生命の生長とは、その生物的欲求と精神的欲求を充足させる条件の整備と、その整備された環境の中で内面的力が発動することである。

整備された環境とは大人のつくったものであり、それがすべての子供に共有されるものでなければならない。かゝる環境を文化と言い得るのである。児童はその成長過程を乳児期、幼児期、少年期に一般には分けられている。本稿においては幼児期を主体として、その生活構造を研究するのが目的である。

## I 幼児期の生物的欲求

幼児期は生命力が微弱であるため、その生物的成長及び存在は大人の養護に依存しているのであり、しかも他の動物と比較して長時間大人の介護の中におかれている。幼児の生物的欲求を概括すると健康である。よく「身心健やかに」と言われるが、その身心の身である。すなわち「身」の生長は健康の概念を構成している。衣、食、住はこの概念を基いてその様式がつくられている。「衣」はつねに清潔を基として、洗濯、着替えの様式、「食」は栄養消化のよいものという点から科学的にその量、質が定められ、住は空気、温湿度、採光等の基準が定着化している。

更に健康法として、子供の日常の行動様式（文化）も定型化しており、朝起きて、

洗面歯磨き、排便後の衛生様式、食前の手洗い、食後のうがい、また外出から帰った時の手洗い、うがい等が定型化している。更に睡眠時間も同様に定型化している。子供はこれらの行動様式を学習し、それが習性化するとき、子供の健康文化へ適応するパーソナリティが形成される。

## Ⅱ 子供の精神的欲求について

精神的欲求は知、情、意の欲求に分類できる。これらの欲求を充たす活動が子どもの生活の姿である。すなわち知の成長、情緒の豊かさ、意識の自覚過程の組み合わせが、子供の生活構造である。

まず知的な生活を論ずる場合、子供の知的欲求は複雑であるため、すべて論述することは困難である。然し端的に言えば、物・色等の概念の構成の活動と言えそうである。小林一茶の「おらが春」に次のように子供の動作を描写している。

「ことし誕生日祝うころはいより、てうちあはは、天窓（おつむ）てんてん、かぶりふりながらおなじ子どもの風車というものをもてるを、しきりにほじがりむずがれば、とみに（すぐに）とらせけるを、やがてむしゃむしゃ、しゃぶって捨て、露程の執念なく直ちに外の物に心うつり、そこらにある茶碗を打ち破りつゝ、それもちにうち倦みて、障子のうす紙をめりめりむしるに、よくしたよくしたとほむれば誠と思い、きゃらきゃら笑いて、ひたむしりにむしりぬ、心のうち一点の塵（ちり）もなく、名月のきらきらしく清く見ゆれば、迹なき俳優（わざおぎ）見るように、なかなか心の皺（しわ）を伸しぬ」

（日本の書物：紀田順一郎著 381 頁より）

一茶の吾が子観察の描写を借りて、1才以後の幼児の知的欲求の動作は「物をつかむ」「しゃぶる」という触覚を通して物の固さ、物の冷さ、温度等の概念構成が成立し、さらに続いて「物を破る」「物をこわす」作業の中でいろいろな抵抗を覚え、「泣く」「わめく」等の感情表現を伴いながら諸種の感覚が次第に発達し概念の構成の段階が次第にすゝんでゆく。更に2才・3才になると視覚を通して概念の数が増し大人の与える玩具、絵本を通して、色、形、動くもの、動かないもの、大きいもの、小さいもの等の概念構成と同時に、これらの刺激から独自のイメージが湧出

し、徐々に自我の発見の段階が明らかになると同時に、好悪の感情が色濃くなってゆくようである。すなわちこの頃より情緒的欲求が激しくなり、その反応を身近な人に求め、これと平行して安定を求め、自我の拡大を主張し、自我を中心とする小宇宙をつくる動作に発展し、その宇宙の中での主人公の地位をきづく、大人から見れば、いたずらが旺盛になってゆく。

これらの子供の欲求充足は多く場合他我を前提とて行われる。即ち対人関係の中で幾多の障害を味いながら欲求充足の仕方を学習してゆくのである。学習とは子どもにとっては、感じ、考え、行動することである。然し多くの場合大人の示す型（文化）に従うことを学習してゆく。例えば愛されたいと子供が思うとき、相手からおくられてくるサインが己れに対するサインであるか否か考え、愛のサインであると考えた場合そのサインを受け入れる行動を示すことになる。

このサインは言葉、身振り、表情などである。これらのものを感じ、考え、そして充たされたという行動を示すことによって、愛のコミュニケーションが始まるよこびに浸れるのである。このコミュニケーションは更に他のものに拡大し、好ましい人、好ましくない人の選択が可能になり、好ましい人に近づき、好ましくない人を遠ざけ、好ましい人との人間関係の中で子供の知的、情緒的機能が発達する。例えば、2、3才の子供が好ましい人に対していろいろな事柄について「どうして」というその成立の理由を尋ねることが頻繁に行われているのを誰しも経験するところである。

次に「意」の問題についてのべることにする。

ここで言う意は意識を中心にしてゆきたい。意識の中で最も大切なものは、善悪の判断力である、日常生活において、何が善であり、何が悪かを意識して行動することは、重要なことである。ところが子供にとって善悪を判別する基準はわからない。その基準は社会の体制によって異なる故に、多くの場合その客観的基準は哲学、倫理学による抽象論になってしまう。然し幼児の場合は幼児を取り巻く集団秩序を基準として、秩序維持の行動、思考様式を基として判定されている。まず家族集団について考えてみると、家族は子供のパーソナリティ形成の基礎的な環境である。パーソナリティの中にある「意」については、「家」はその「家」の属する社会と

子供の中間的媒介的機能をもっている。「家」を取り巻く社会にはその社会特有の規範（制度、慣習、道德）があり、家はその社会の構成単位である以上、必然的にその社会の秩序維持のために貢献するように仕向けられている。従って「家」（家人）はその子どもに対して社会の規範に適応するように仕付けてゆくのである。子供がその規範に積極的に適応すれば賞讃され、不適応の場合は罰（叱られる）せられる。この過程において子供は善悪の意識が培われてゆくのである。

次に子供のあそびも、意識の培養の重要な要素である。

あそび については、いろいろの効果があげられるが、こゝでは子供の精神、とくに「意」の問題に関連しているものを取り上げることとする。子どもの生活構造の中で、最も大切なものの一つは「あそび」である。子供はあそびの中から自我を発見し、自我を発展させる。例えば、玩具あそびは、玩具に自己を投入しその反応を味いながら自我の存在を認識する。女の子の人形あそびは、人形に対して、自己の心の中に画かれた人物を投射し、その反応が自己の抱く期待と同一視することによって自己の現状を肯定し、自己を客観視して、人形に対応するという、自我の認識を拡大してゆく。

また友だちとあそぶ際は、最初は恍惚段階からやがて合意到達という段階を経験し、こゝから遊戯が始まる。遊戯にはルールがあり、また遊戯への参加者には一定の行動の型がある。すなわち参加する個々の子供にはルールによるポジションが割り当てられ、そのポジションに定められた行動の型に従うことが規定される。このポジションを守ることによって、それぞれの子供の遊戯集団における地位が確立され、仲間からの期待が寄せられるのである。この地位の決定、仲間からの期待に応じている自我をそれぞれの子どもは自覚する。この自覚は同時に他の仲間の地位および役割に対する自分自身の信頼心を喚起する。こゝに仲間意識が生れ、おれたちは仲間だという集団意識にまで発展してゆくのである。かくして、ルールを守り、自己の役割を遂行し、仲間という集団の秩序を保持しようとする道德心が芽生え、内面化してゆく。

## 模倣の生活

子供はいろいろな欲求をもち、この欲求のすべてを充足しようとするが、これがスムーズに行なわれない種々の障害にぶつかる。子供は自己の欲求の前にたちはだかる障害をどのように除去するかを過去の経験から割り出してゆく。ある場合は障害を真正面から取り組み、あるときは廻り道をして回避しながら目的を達し、またあるときは、障害のためにその目的を断念する。この三つの方法の選択の中で最も子供にとって有効なものは、省エネルギーの方法である模倣である。模倣とは他の人、大人が既に子供と同種の欲求充足に成功した型である。子供の日常生活の中で見聞したこの型は、子供にとっては、誘意的にはたらくのが常である。従って子供の生活構造の中に取り組みされる模倣のサンプルが問題となってくる。特に最近目立つことは、子供の周辺にいる大人（親たち）が子供の欲求を先取りする傾向が顕著になっていることである。子どもが逞しく生きていくためには、欲求充足を阻むものへの遭遇と、阻むものへの排戦と、この排戦の中から充足方法を見出す経験は、子供の成長には不可欠なものであらねばならぬ。ところが最近の経済成長から生れた豊かな物資の社会の中で、大人は、子供の欲求充足の選択過程を待たずに物を与えることによって、子供を甘やかしてしまっている。子供が欲求充足の方法を模倣までに辿りつく過程の中で、先輩がつくり出した欲求充足の型を享受する感動こそ、子供の生活をより充実させるものである。この尊い子供の生活構造の中での価値ある資源を大人が無意識のうちに奪って、得々としているのは、悲劇である。

## イメージと空想

子供の日常生活において、子供はいろいろなものに接触する。例えば玩具で遊んでいるうちに、玩具を媒介して、心の中に彼自身の心像を画き始める。女の子であれば、人形に彼女の心の中に画き出した人を擬し、その人形に名前をつけ、その名前に相応した語りかけをする。男の子であれば電車の玩具を動かしているうちに、自分が駅長となり、車掌となり、運転手になり、乗客になり、自己の心像に画かれた人物になり切って、夫々の動作をする。

また物語りを聞く子供は、物語りの主人公に自己を置き換え、物語りの進行に緊張していく。こういう変化は、むづかしく言うと、瞬間的ではあるが自己の否定から新しい自己の存在への移行の経験である。以上のような子供の経験は日常頻りに行われている。イメージおよび空想の生活は、内面的なものであるが、子供にとっては、現実から遮断された自由で楽しい時である。この自己が画いた世界の中で、主宰者として、自由に振舞える環境はすべての拘束を否定し、清らかな、冒されることない、理想的世界の創造をほしきまゝできるのである。この事実は子供の独特の生活構造であり、子供が子供の世界に自己を止揚し、この次元からやがて現実に戻るとき、以前の自己でない心豊かな人間となる素地が築かれてゆくのである。

子供のイメージ、空想は現実に戻った次点において、現実化への誘意的な要素となり、これがやがて、子供心に理想追求の起点となる筈である。このように見えてくると、子供に空想を描く場面、イメージを誘発する動機の提供は、大人の役割の一大要素であろう。

( 上田女子短期大学学長 )